

## 〔資料〕 面接授業担当講師と学生との往復書簡

### 『衣生活概論』

学生 浅野佐保子

1学期には、放送大学における「衣生活概論」の面接授業で、大変興味深い講義と各種実験に触れさせていただきありがとうございました。私の高校時代には、家庭科は男女共選択制で、とうとう履修しないまま卒業してしまつたものですから、家政学関係の講義は中学校以来約30年ぶり、実験は全く初めての経験でした。普段何気なく手にふれ、経験的に感じとっていた各種布地及び繊維の特質を、吸水速度しわのつき易さ、組織と糸密度、剛軟性、曲面形成能、染色物の洗濯堅牢度、定量的表色法など多方面から、実際に細かく観察し、実験や計算によって定量化する方法を学び、被服学全般の中での位置づけ及び洗浄の科学についての講義とあわせ、主婦としての生活に新しい視点を与えていただきますと同時に、広く自然科学を学ぶ場合に共通した方法論のヒントを得て満足しています。

しいて今後に期待する点をあげますと、結局、総時間数の不足につきると思うのですが、得たデータについてのディスカッションや、他の学生のすぐれたレポートを目にする機会あるいはオリジナルな実験を試みる余地がなかったことが残念です。受講者は、学問的には未熟でも、実際の衣生活に直接携わる経験の深さからみれば、一般大学の学生とは一味違う方々の集まりですし、また他大学では珍しい男性受講者もいらっしゃるのですから、多様な学生集団の、素人の強みを活かしたユニークな着想や視野の広さに触れ得る機会があれば、と思います。

とはいっても、オリエンテーションを含め僅か5回の授業ながら、提出したレポートも20枚に及び、特に本年度は「衣生活概論」の面接授業を、自然科学的内容のものと服飾美学的内容のものにわけて、いずれかを選択出来るように工夫されていることなどを含め、誠に充実した内容であったと思っています。

さて、放送大学に第一期生として入学して以来1年半、「自然の理解」を専攻する主婦学生として、面接授業全般についての個人的意見と希望をのべさせていただきたいと存じます。

本学では、卒業最低要件の124単位中、20単位を面接授業で充当するよう定められ

ています。しかもこれらはすべて2～4単位の放送授業と抱き合わせて選択せねばならない為に、実際は、卒業要件の半分に当たる最低60単位以上を、面接授業が実施されている科目で修得せねばならないことになります。ところが、本年度「自然の理解」専攻の面接授業は、6つの学習センターを通じて、一学期0、二、三学期各1（「数値計算とデータ処理」東京第一センター）のみであり、又自然科学系の基本、基礎科目も、主婦が受講可能なウィークディの昼間には全く実施されていません。面接授業の単位は、まとめて一度に取得することは困難なので、やむを得ず、自分の都合のつく時間の科目を、一つの学科としての学問体系、難易度、関心のあるなしなどにおかまいなく、手あたり次第に選択せねばならないのが現状です。例えば、「学習心理学Ⅱ」を選択しようとするれば、その前提として、「学習心理学Ⅰ」は勿論、「心理学概論Ⅰ、Ⅱ」「発達心理学Ⅰ、Ⅱ」などの履修が必要と思われますが、他専攻の学生にはそこまでは不可能でしょう。それよりも「2学期、木曜日の午後、神奈川学習センターではそれしかない」の動機が優先するようです。このことが、私の個人的事情によるものだけではないことは、過日実施されたアンケート調査で、面接授業の選択理由に、曜日の都合をあげた学生が多かったことから察せられます。

4年間で卒業することを前提とすると、1学期に平均2つの面接授業を受講する必要があるわけですが、「自然の理解」を専攻する場合、その為には毎学期最低6単位を、専攻以外の科目で履修せねばならないわけで、特に体系的な基礎学力や知識が必要な自然科学系専攻者にとっては、その負担感は想像以上のものがあります。もっともこの負担が、学際的分野の知識習得に役立ち、学問的食わず嫌いをなくすという望外の効果をも生み出している様ですが。

面接授業に関して、今一番望むことは、四年分の実施科目、時間割、実施センターを予め発表してほしいということです。ビデオやテープレコーダーの活用で、時間調整の可能な放送授業と異なり、限られた時間内で履修計画のやりくりをしている本大学の学生にとって、これは最も必要なことではないでしょうか。

通信制教育における面接授業の意義については、今更のべるまでもありませんが、その最も重要な役割は、放送授業及び印刷教材の補完にあるといえましょう。当大学においては、放送授業及び印刷教材が、恐らく一般大学では考えられない程、完璧に近いもので、時には恵まれすぎと感ずる位ですから、余計に面接授業のシステムや内容に不備があるように思われるのかも知れません。さてこの補完という点から、面接授業に期待する点を挙

げてみますと、人間的ふれ合いといった心理面はさておき、形式としては、自然科学系科目では実験を、語学では訳読のレポート提出や発音、会話を、又一般講義ではゼミ形式など、いずれも学生主導型の授業が望ましいと思います。また授業内容としては、現在放送授業と印刷教材も満足 of いくものではありませんが、その公開性と保存性の制約から、どうしても既に確立した学問体系の概論的解説に重きがおかれがちになるようです。従って面接授業では、現在進行形の、試行錯誤の段階にある学問の実態、講師自身が今、何を追求しているかの解説に重点をおいていただきたいと思います。

以上思いつくままに不平不満を並べたようになってしまいましたが、私は決して現在の放送大学に満足していないわけではありません。高校時代から何となく不得手だと信じこんで、人並の好奇心は抱きながらも避けてきた理科系の学習を、40代も半ばになって、系統的にやり直すことが出来、長年の悲願がかなった思いです。「不得意科目を敢えて専攻する」という発想は、一見可能性豊かにみえるようでも、人生のスタートラインに立つ青年時代には到底出来ないのも、充分な余裕はないまでも、生活の基盤も確立し、人生の方向も定まった今日でこそ可能な選択であると思い、その機会を与えていただいた放送大学には心から感謝しております。

担当講師 齊藤 昌子

お手紙拝見致しました。61年度第1学期に履修された「衣生活概論」に関することから、広く面接授業全般について、いろいろの面からの御意見を大変興味深く読ませていただきました。私は、面接授業の講師として「衣生活概論」に関連する事柄についてお返しし、全般的なことに関しては担当教授であり、第1学習センター所長であられる矢部章彦先生からお答えいただこうと思います。

まず、「衣生活概論」の面接授業に深い興味をもたれたことを嬉しく思いました。実験は、設備、器具などの点で制約もあり、手軽にやれるもので、興味をもってもらえる内容ということで苦心したのですが、矢部先生はじめ、6学習センターの講師が集まって案を練った甲斐があったと、まずは喜んでいきます。

お手紙の中で述べておられました、得たデータについてのディスカッションをして欲しい、他の学生のすぐれたレポートを見たいという希望については、提出されたレポートの中には授業中に行った実験をまとめただけでなく、さらに自宅にある布地を用いて試験

を行った結果も加えられるなど、意欲的で秀れたレポートも目につきましたので、さっそう次の授業から取り入れたいと思います。3番目の、オリジナル実験を試みたいという点については、この授業が「衣生活概論」という名称からおわかりいただける通り、衣生活に関する実験としては、いずれもごく初歩的なものであり、もう少し専門的な事を学んだ次の段階にその機会を作る方が、実験を組み立てる際の予備知識が多いという点で良いのではないかと思います。その機会は卒業研究などであると思いますが、その際には実際の衣生活に直接携わる経験豊かな主婦学生層の方々の、実情に即したアイデア、ユニークな発想を十分発揮していただきたいと期待しています。

面接授業に期待する授業内容として、現在進行形の、試行錯誤の段階にある学問の実態、講師自身が今、何を追求しているのかの解説などを希望しておられましたが、「衣生活概論」ではそれらの事についてふれる機会がありませんでしたので、ここで少しふれてみたいと思います。

衣生活に関する分野は、主に家政学の中の被服学で取り扱われています。被服学は、家政学の中の伝統的な分野として、1つの柱をなしていますが、家政学は学問としては比較的新しく、未だ学問としての確立が充分熟していないのが現状です。

家政学といえば一般的には女性の学問と思われていますが、家政学はもともと女性のものであったのではなく、古代ギリシア、ローマ時代以来、本来男性のものでした。300年前にオーストリアの貧乏貴族ホーベルグがくわしい家政書を書いています。その後産業の発達とともに生産の場であり、消費の場でもあった家庭から、男性は生産を、女性は消費を分担するという分業が進み、家政は「女の家政」へと変貌すると同時に、家政は家事へと矮小化してきました。（なぜ「女の家政」になったかについては、飯塚信雄著「男の家政学」朝日選書313、1986年にくわしく書かれていますので、お暇の折に読んでみて下さい。）

日本における家政学は、昭和24年新制大学の設置され出発しました。その後の社会の変化はめざましく、家政学は学問としての確立に努力すると同時に、急激な社会の変化への対応を迫られつづけて現在に至っています。例えば、衣生活においては、発足当時は家庭縫製がほとんどでしたが、現在、婦人服の80%以上、紳士服においては90%以上が既製服化し、家庭縫製はほとんど行われていないのが現状です。家政学では、繊維から衣服となり、着用段階にまで及ぶ全ての過程に関する研究が行われることになり、その結果、各分野の研究は専門化あるいは細分化せざるを得ず、そのことが逆に、現在の家政学の研

究は諸専門科学の寄せ集めに過ぎないという批判となってあらわれてもいます。現在、多くの家政学者が、どこに自分の研究の視点を据えたらいいのか、どのような方法論を用いればいいのか、模索している段階と言えましょう。これからの家政学は、「女の家政学」ではなく、又「男の家政学」でもない、「生活者全体の家政学」として、もっと男性からも女性からも認識されなければならないと思っています。

私自身は、被服整理学という自然科学的手法を拠り所としている分野で、洗浄の科学に関する研究をしています。浅野さんとは逆に文科系の学習を40を過ぎてやり直す必要を感じています。それが、私の今後の研究に幅をもたせ、学際的研究へとつながっていくものと考えています。

放送大学での授業は、私自身が非常に楽しみにしている時間ですが、その大きな理由は受講生の年齢幅にあります。10代から70代に亘る幅広い年齢層の、しかも圧倒的多数の主婦学生層のかたは、授業態度が非常に熱心であり、生活に即した質問がその場でどんどん出され、毎時間30分程度も質問に費すような状況でした。さらに、経験豊かで、年齢も私より上の受講生（浅野さんもそのお1人ですが）を対象に授業を行うという放送大学ならではの貴重な機会を得たことを嬉しく思っています。

東京第一学習センター所長

矢部 章彦

面接授業でも生き生きとしたお姿を拝見しましたが、「自然の理解」専攻で関連の面接授業が満たされない、という動機でこの「衣生活概論」の自然科学系5回にまとめた授業に参加されたこと、本学ならではの好機であったと、新しい試みの成功を喜んでおります。

斎藤昌子さんから、面接授業に関連した御要望へのお返事が述べられましたので、全般にわたる御意見などについて、思いつくままにお答えしてゆきましょう。

まず、面接授業に実験実習を伴うものについての構想と現実から述べます。

面接授業として学習センターごとに用意しているのは、僅か40単位分に過ぎず、それも科目ごとに交替でやるという原則から、具体的な設定には、関係者が大変苦勞をしております。まず非常勤の講師をお願いすることが、主任講師の第一の任務ですが、それぞれ本務をお持ちの先生方に、土・日曜日あるいは夜にまで授業をお願いすることに、難関があります。この様な状況の下でご出講頂いている先生方は、いずれも本学の趣旨に賛同さ

れ、情熱をもって授業に当って下さる方々ばかりです。逆に先生方から、一般の大学生とは異なる社会人の学生に接して、その熱気溢れる受講態度に深く感銘している、との御感想を頂くことがしばしばです。

放送という2次元の画面で接する講義と、実在観のたしかな生の講義を通じて体得するものとの差は明らかであります。

人間同志の触れ合いが教育の本義であるからには、一年前からの企画立案、講師の出講日時確定などの多くの手続上の苦勞を乗り越え、しかも講師諸先生の積極的な御協力で成立つこの制度は、本学の建前の理想を貫く上に欠くことのできないもの、との確信を深めております。

また、6センターにわたり、実験設備、機械、器具・薬品等を整備し、短かい回数ながら教育効果を高めることも、並大抵の苦勞ではないことをご諒察下さい。

幸い、年度の進行につれて、その整備は進んで来ておりますが、担当講師がご自身の大学の器具・材料・薬品を持込まれ、準備のため研究室の方々の協力を仰いで、授業を充実するよう心を砕いておられるのに、甘えざるを得ない現状なのです。

不足だらけの中で、精一杯やっているという草創期の努力を前向きに受取って頂ければ幸いです。

第二には、面接授業の内容についてです。

学問の最新の情報を、との御要望ですが、これ又至極もったもなことで、公開の講義では得られない気楽な裏話や、その分野での現在の問題点についての論評などを、これからもどんどん取入れて頂ける様、諸先生によくお願いしておきましょう。

ゼミ形式の学生の意見も汲み取った討論も必要でしょうが、これは、一般教育から専門へと進む間に、学生さんが身につけたものの深さが物をいうこともあって、やはり主体は4年次の卒業研究に期待して頂きたいと思います。特に本学の様に学力に格差のある場合、あまり深入りして初学者の学習意欲を失なわせないための配慮も必要なのです。

一部で、サークル活動として設けられている研究会などのシステムが、この穴を埋めるのに相応しいと思いますし、科目によっては時間外のお茶の会を設けて、質疑討論にあてている例もあります。

第三には、あなたが体験を通じて述べておられるように、今まで苦手と思い食わず嫌いで通して来た新しい分野へのチャレンジが、この大学では可能であるという点についてです。

事実、会社で経理業務ばかりやって来た方が、壮大な宇宙に思いをはせ、つっ込んだ学

習をとの願いをこめて入学された方や、日常茶飯の家事に明け暮れて、迷いをふき切るために、文学や哲学の世界に挑戦しようという方など、動機や目標はさまざまですが、それぞれの歴史と現状をふまえて、高度の教養を目指しておられることに変わりはないと思います。卒業研究を経て、やがて我々も待望する修士や博士の課程への夢をふくらませようではありませんか。

最後に、斎藤さんも触れておられましたが、生活科学という新しい学問分野についての私の長年の夢を語らせて頂きたいと思います。

家政学の道に入って既に35年、このごろようやく、すべての人々が“生活者”としての意識に目ざめて来たと思われることは、私としてはこの上ない喜びなのです。

斎藤さんのいう「生活者全体の家政学」という位置づけが、一人でも多くの学生の共感を得られるよう、これからも努力するつもりです。

とかく、自然科学系に偏り勝ちだった戦後の家政学が、生活文化も包括した広義のものに目標を変えつつある現況からも、生活の質の向上を求めて、今後ゆるぎない学問体系を築いてゆくためにも、生活の技術に偏したり、夢食いの上べの文化に雷同したりしないためにも、生活にかかわる学問の充実は、家政学や生活学など種々の呼称はあっても、本来一本のものと考えてゆきたいのです。